



合気道と座間味・スキューバ

会員 藤谷 護人 (44期)

友人のA君から突然「廃業・北海道スローライフ宣言」を聞かされて大変驚くと共に心に動揺があった。重い責任感を背負い、過酷なストレスと闘いながら毎日を過ごしている、僕の心の片隅にも夢・ただし実現できない夢として思い描いていたと気づかされたからだ。彼は開業当初からそれはハードに働いていた。しかし僕もこの16年間睡眠時間はナポレオンに負けないくらいタフに働いてきたので、彼の決断を賞賛する杯を交わしながら二人の内どちらがより働いたか、という議論をした。丁々発止やり合ったが結果は「藤谷が目一杯働いてきたのは認めるが、お前は合気道と座間味・スキューバという趣味をやりながらの16年、俺は何も無しに仕事だけの16年だ!」という彼の一言で僕の負けとなった。

合気道と座間味・スキューバは、趣味というよりは、僕の生活にとって無くてはならないものとなっている。もし、この2つと出会っていなければ、僕は過剰な業務ストレスの重圧に押し潰されて、心身の健康を維持することは到底適わなかったと断言できる。

合気道との出会いは、1990年7月東京地裁での民裁修習中のたった1日民事第29部に特許部の見学に行った夜の懇親会で、特許庁から調査官として出向してきていた山口金弥先生と席が真向かいになり「合気道やりませんか!」と誘われて、「はい」と二つ返事をして、翌日にジャージを持って裁判所地下の道場に行き、東京地方裁判所合気道部に入部したのが、きっかけである。初稽古の翌朝、身体中が得も言われぬ心地よい疲労感で満たされていた。激しい運動の後に筋肉に乳酸が蓄積した疲労感や激務の後の重苦しい疲労感とは完全に異質で、生まれて初めて自分の体内に「気の流れ」を感じた。稽古を始めて15分位すると気が流れ始める。そして一時間余りの稽古の後には、ストレスも疲労も胡散霧消し、手指の先から気が溢れ、脳の回転速度が早くなっていると感じるときもある。合気道の良いところは何歳からでも始められ長く続けられることである。身近には72歳で始めた人や80歳で7段の現役の猛者もいる。僕も38歳から始めて17年、2006年秋に4段を

頂き、今では師範代として指導の一端を担っている。教える立場になると自分が如何に未熟かということに気付かされ、合気道の深遠さにますます引き込まれている。

沖縄慶良間諸島座間味島という「楽園」に僕を引っ張り込んだのは、弁護士4年目に負け筋濃厚な難事件に逆転大勝利した依頼者の「騙されたと思っておいで、人生変わるから」との座間味島への勧誘であった。皆さん、座間味島の空気は「固体」なのですぞ! 噛み締めると「強烈な太陽と豊潤な緑と濃厚な海の詰まった味」がする。そしてコバルトブルーの海の中には世界で二番目に綺麗といわれる珊瑚礁と熱帯魚たち、一日に二本潜って夜は泡盛、二日も経てば身体中の空気が入れ替わり、細胞たちが喜んでいっているのを感じる事が出来る。僕のお袋も80歳のときに息子がやっているのだからやりたいというのでスキューバダイビングの初体験、そして2007年6月83歳のお袋にせがまれて二度目のダイビング、45分間の海中散歩から上がったときの「あー楽しかった」といったお袋は満面笑みで輝いていた。そんな訳で、命の洗濯のために、これからも毎年6月下旬梅雨明けしたばかりの座間味島に通い続けることだろう。

